

あおもりの川を愛する会 河川文化講演会

描かれた岩木川

～河川の利用と人々の生活～

講師 本田 伸 元青森県史編さん近世部会執筆協力員
(青森商業高校元教諭)

とき 令和6年5月16日(木) 16:00

ところ アラスカ会館



写真1 本田 伸先生の講演 2024年5月16日



写真2 描かれた岩木川の講演



写真3 本田 伸先生の講演 2024年5月16日

青森の川を愛する会 河川文化講演会

描かれた岩木川

～河川の利用と人々の生活～

- 1 津軽の国絵図と岩木川
- 2 津軽平野の開発と岩木川
- 3 城下絵図と岩木川
- 4 「暗門の滝」と木材の利用
- 5 近代化の中の岩木川



平尾魯仙



蓑虫山人

元青森県史編さん近世部会執筆協力員 本田 伸

令和6年5月16日（木） 青森市・アラスカ会館



陸奥国津軽郡之絵図

(青森県立郷土館蔵)

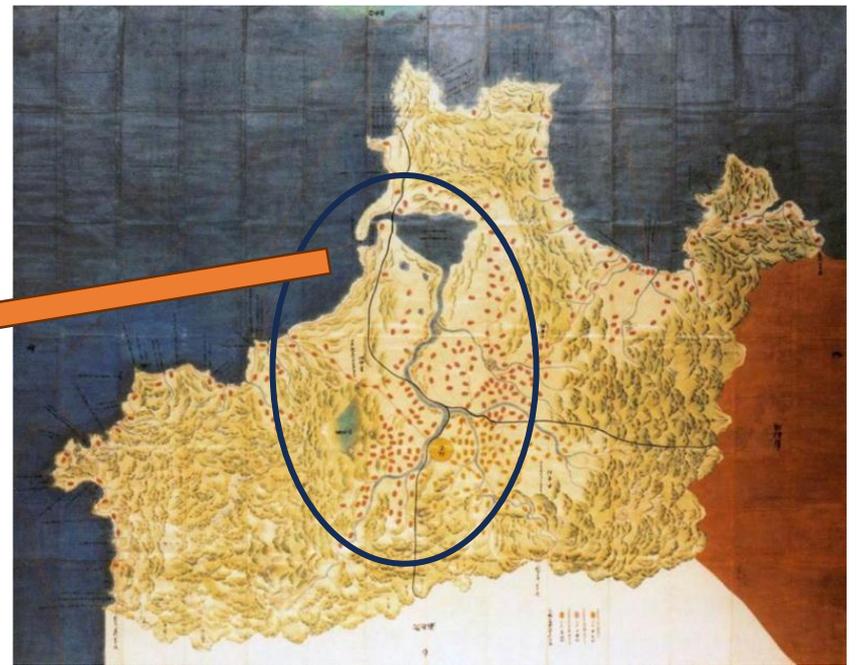
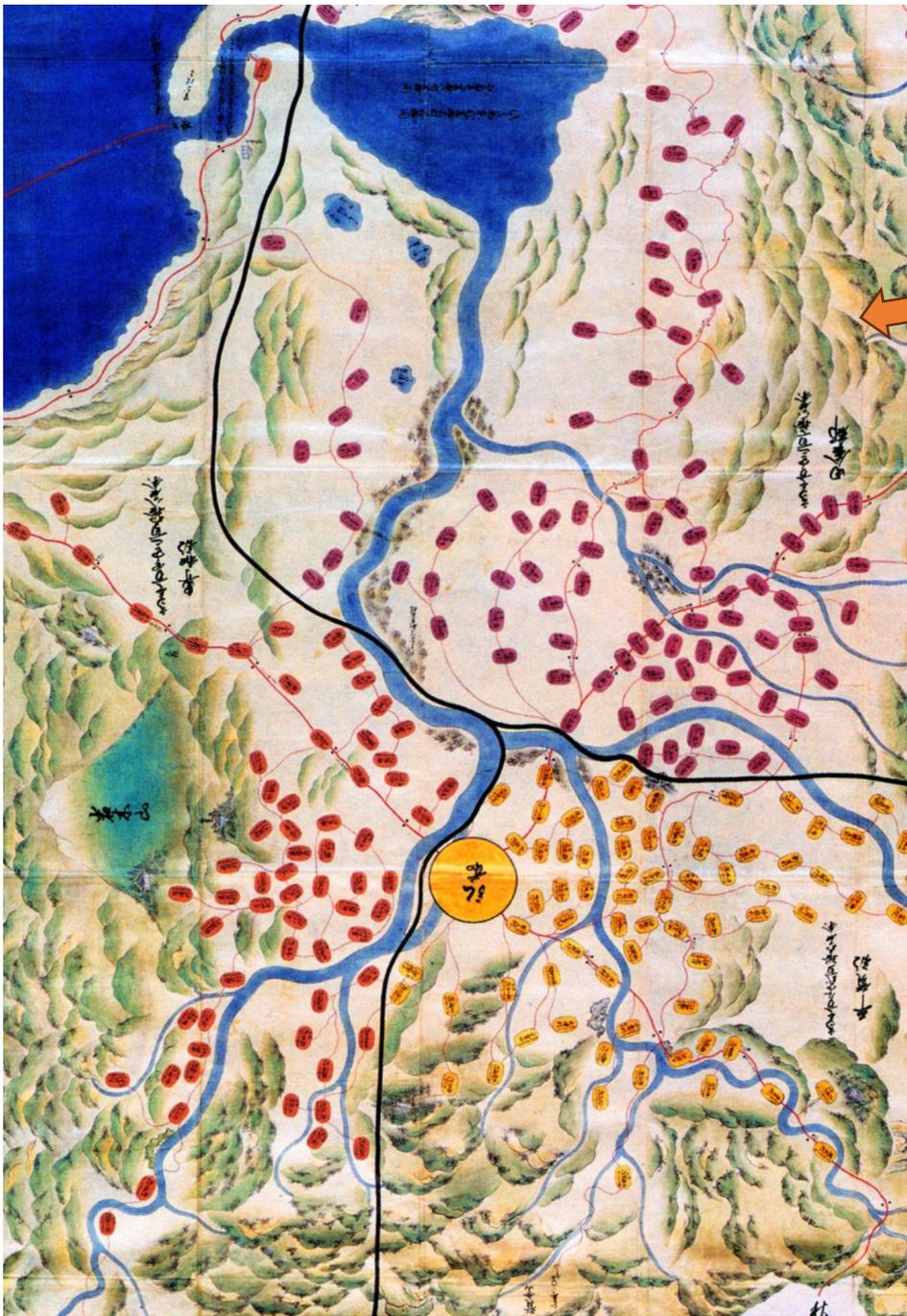
県重宝

貞享2年

(1685)

39.3 x

48.8 cm



「陸奥国津軽郡之絵図」と岩木川

青…川、湖、海

黒…平賀・田舎・鼻和郡の郡界線

小判型…村形（村名＋石高）

黄…平賀郡の村々

桃…田舎郡の村々

橙…鼻和郡の村々

岩木川下流・十三湖



津軽の河川



岩木川上流



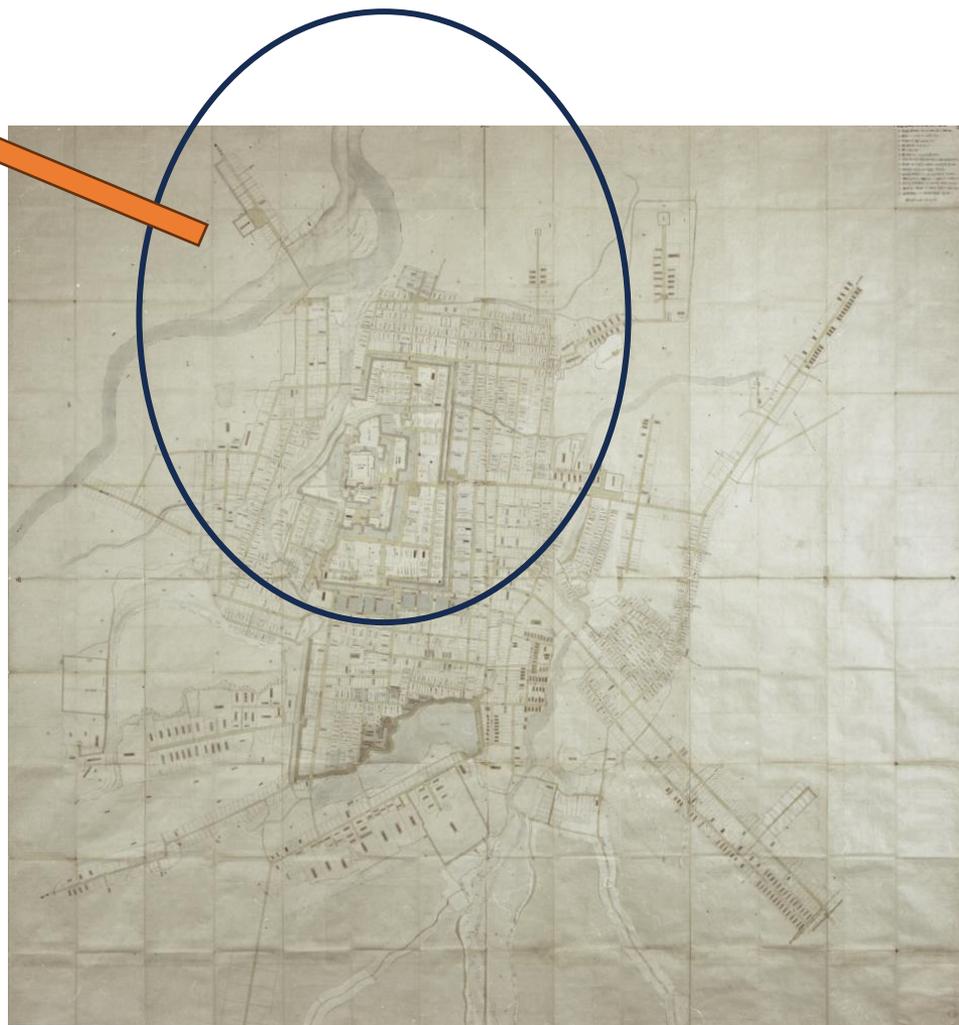
平川・浅瀬石川







(部分拡大)
貼り紙により、延宝5年(1677)から元禄15年(170)までの川筋の変化がたどれる。



弘前惣御絵図 (弘前市立博物館蔵)

延宝5年(1677)。城の西を流れる岩木川は、鳥井野付近で二筋に分かれ、城の北側で再合流していた。外側は駒越川、内側は樋ノ口川と呼ばれたが、当時の絵図には「岩木川」とだけ書かれている。

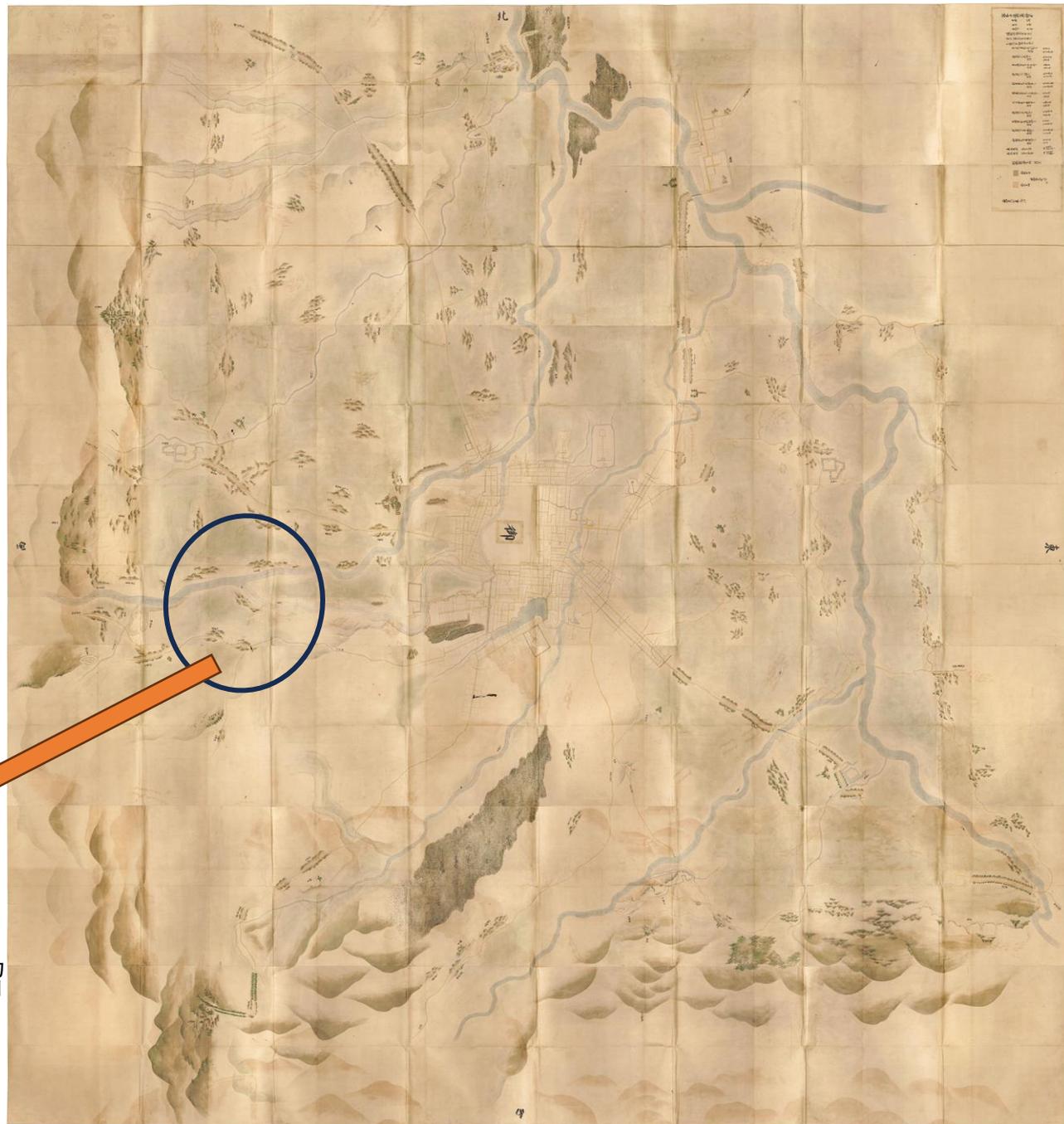
岩木川にはきつい曲流部があり、しばしば氾濫を起こしたため、治水工事が必要で、その度に川筋が変わった。

弘前并近郷之御絵図 (青森県立郷土館蔵)

貞享元年（1685）。タテ
386×ヨコ365cmの巨大な
絵図で、弘前城下10km四
方を描いたもの。

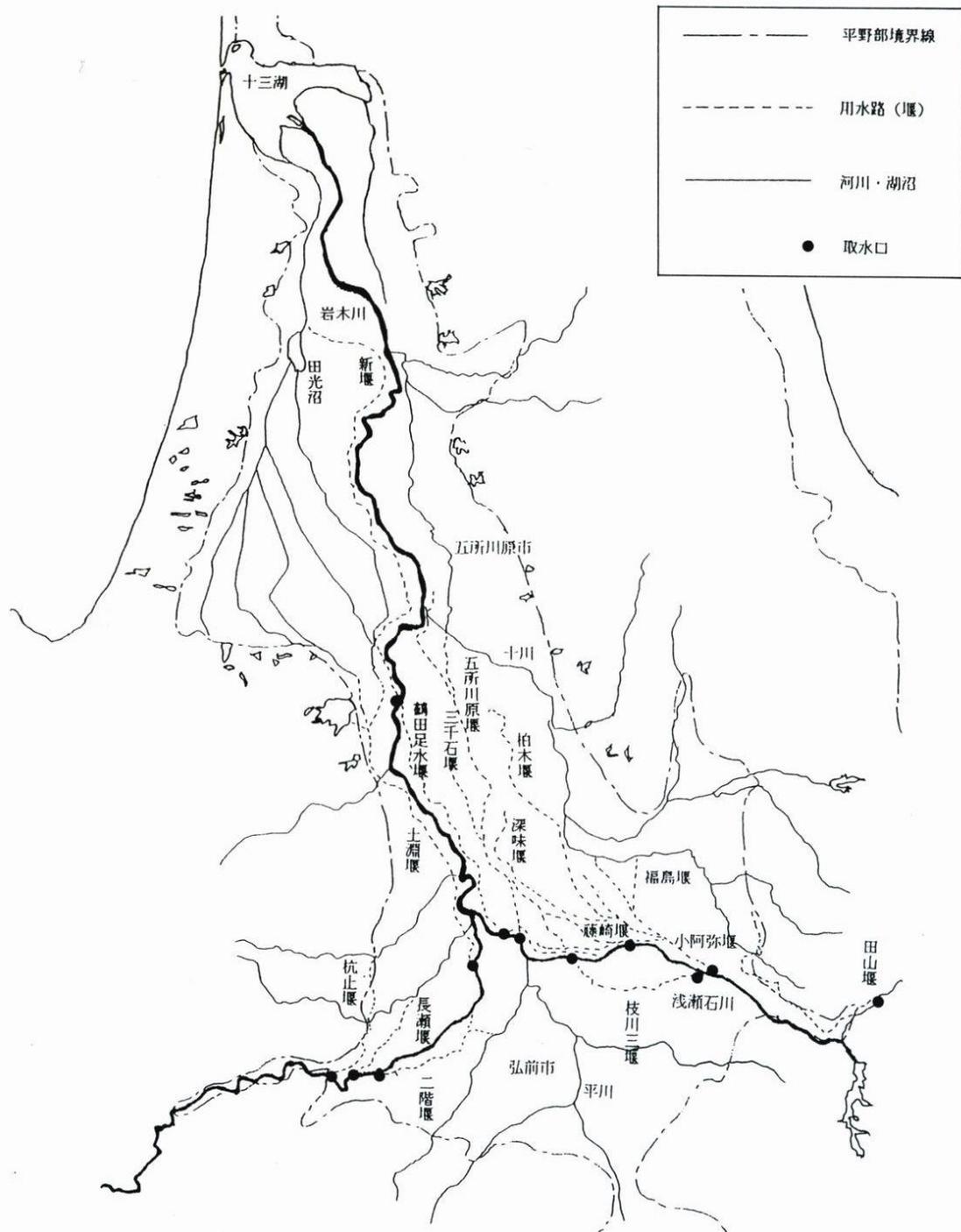


鳥井野～悪戸付近
樋ノ口川は鳥井野付近で留
め切り、壕に代用された。





「弘前并近郷之御絵図」と悪戸の堤
悪戸付近の留め切りは「堤」と表現されている。

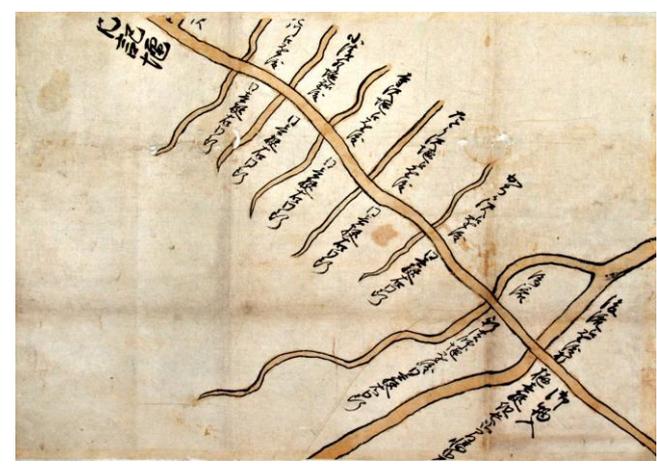


津軽平野の農業用水図

上流と下流の高低差が小さい津軽平野では、農業用水を確保する手段として用水路の開鑿が積極的に行われた。用水路の系統は、

- ①岩木川上流部で取水
- ②岩木川中下流部と十三湖を利用
- ③浅瀬石川で取水

に区分できるが、上流と下流とで取水方法が異なったり、排水の再利用が行われたりするため、実際には細かく複雑な水路網が、平野一面に張りめぐらされている。



葛原村の用水堰

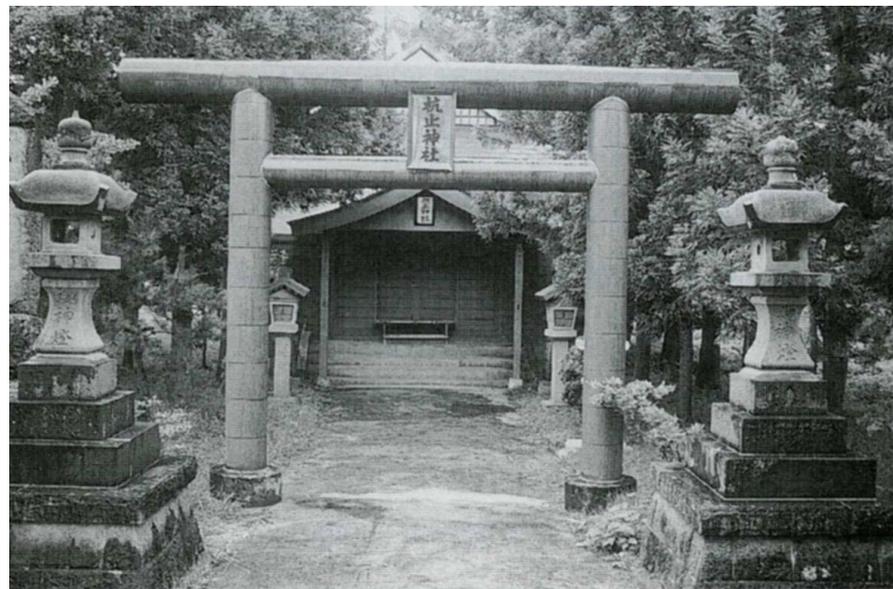


杭止堰の統合頭首工

杭止堰の開鑿と杭止神社

岩木川の最上流部に開鑿されたのが杭止堰。現在はここに統合頭首工が設けられ、取水が管理されている。

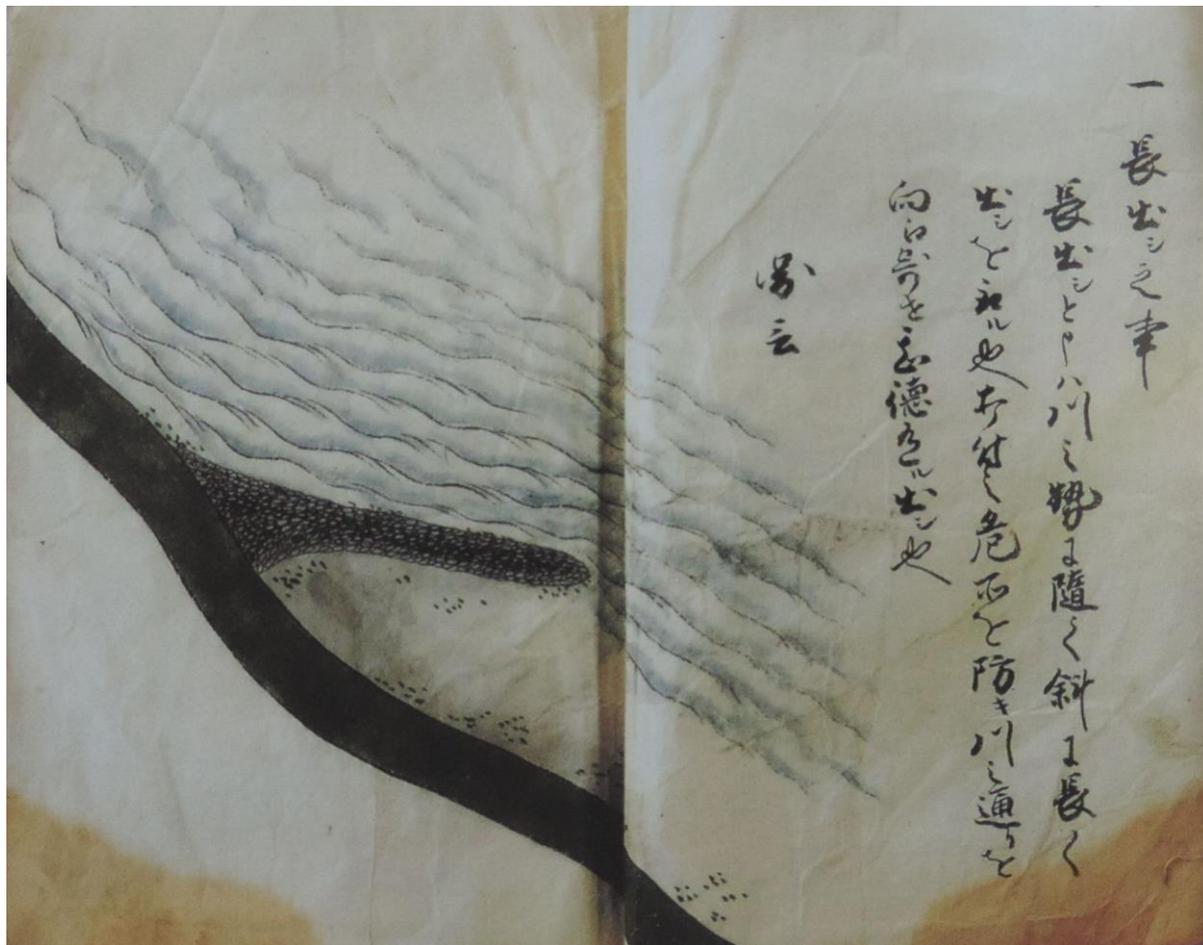
付近に建てられた杭止神社には、神官の川崎権太夫が水に入り、暴れ川を鎮めて用水工事を完成させた、との伝説がある。この話は、藤崎町の堰神社に伝わる「堰八安高の人柱」伝説と、軌を一にするものである。



杭止神社



奉納絵馬「川崎権太夫の入水」



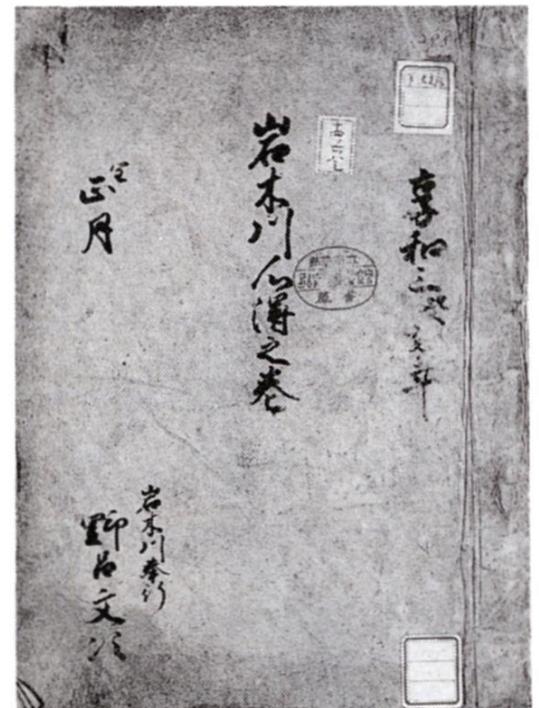
岩木川の治水

01 長出シ

「青女子堰本帳」には、次のようにある。

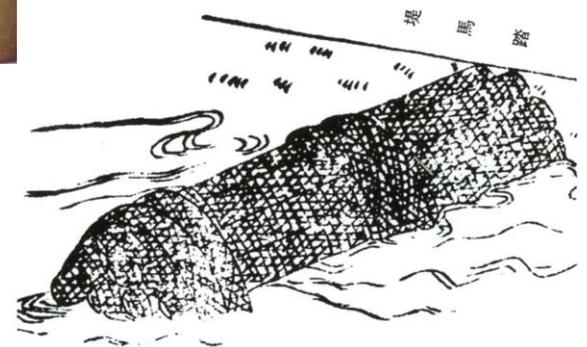
- ①上流部… 水勢を妨げないように、石留にする
- ②中下流… 蛇籠出しを用いて、水勢を弱める
- ③最下流… 俵留め漏水を防ぎ、完全に止めきる

その上で「岩木川心得之巻」のような、堤防や留口の工法などを解説した治水マニュアルが作成された。

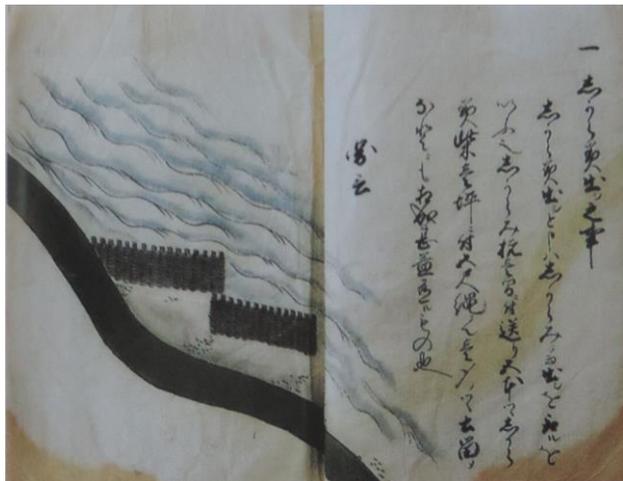


岩木川心得之巻

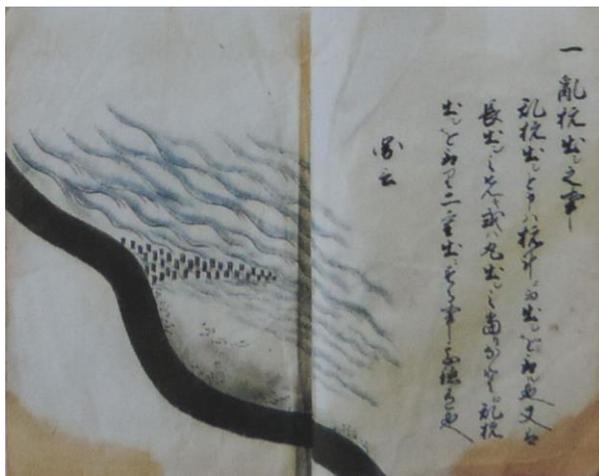
(弘前市立図書館蔵)



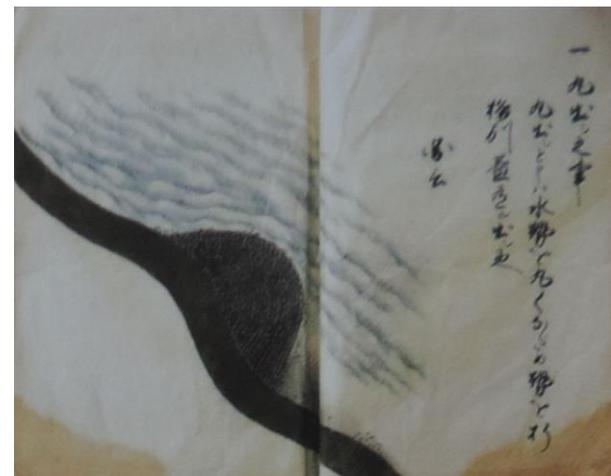
蛇籠出し (『図録農民生活史事典』より)



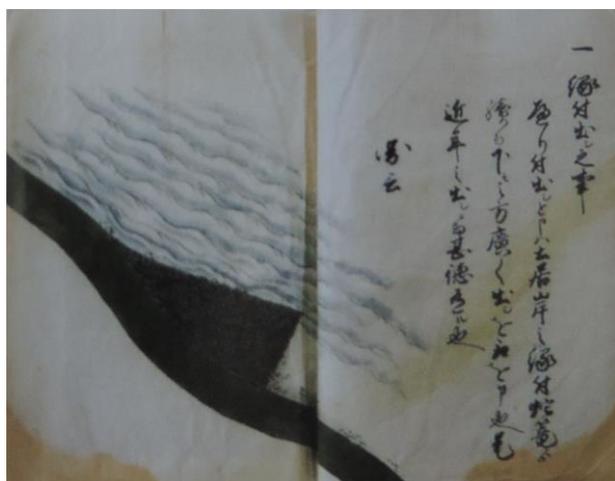
06 しがらみ出シ



04 乱杭出シ



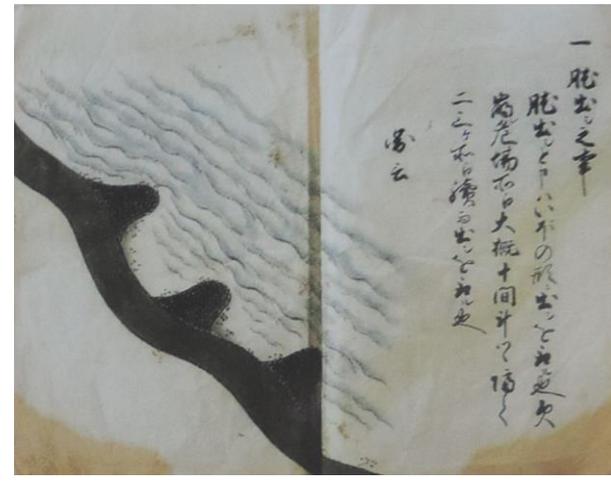
02 丸出シ



07 縁付出シ



05 逆出シ



03 尻出シ

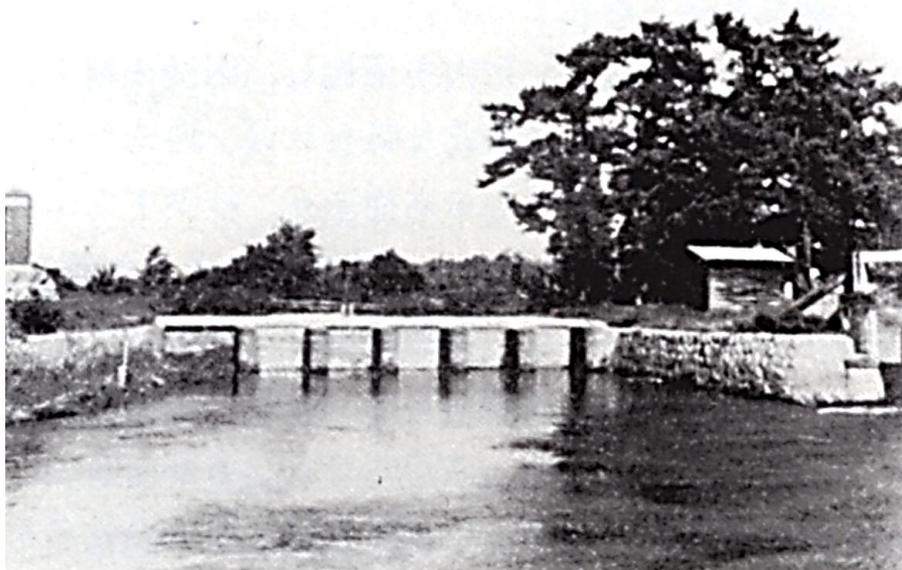
「岩木川心得之巻」は享和3年(1803)、岩木川奉行の野呂文次が編集。岩木川の治水に関する28か条から成る。『新編 弘前市史 資料編 岩木地区』所収。**12**



土淵堰（現在）



船水の取水口



中崎の制水門



野木の分水定盤

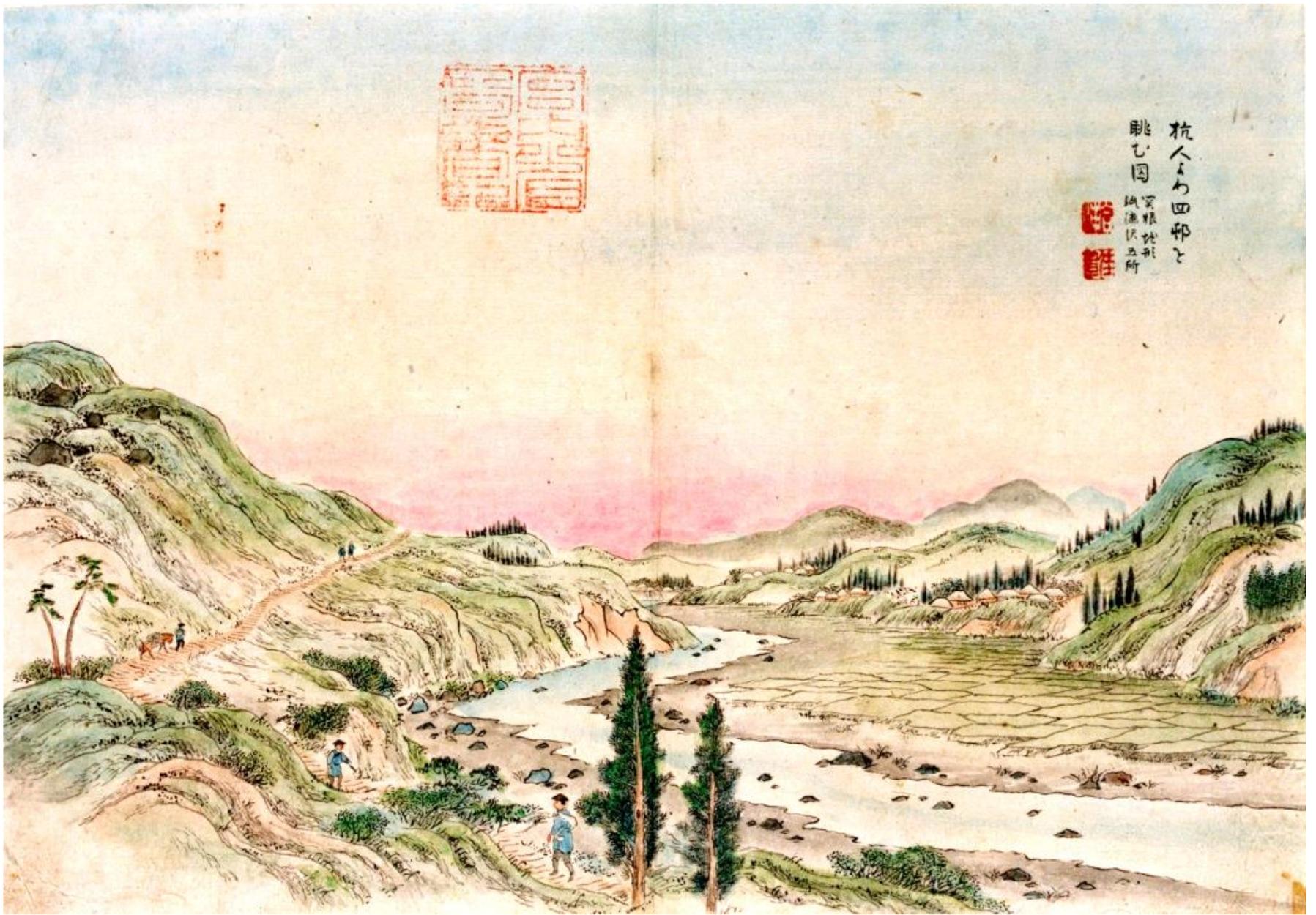


津軽平野の開発

弘前藩4代藩主津軽信政は新田開発に力を注ぎ、岩木川の治水、土淵堰など藩営用水の整備、屏風山防風林の植え立てなど、多くの土木工事を行った。万治3年(1660)築造の廻堰大溜池もその一つである。

廻堰大溜池

北津軽郡鶴田町。岩木山を水源とする貯水池で、青森県最大の人造湖である。堤長4.2 kmは日本最長。岩木山の見晴らしが良いため、「津軽富士見湖」と呼ばれている。



安門瀑布紀行01 杭人より四邨を眺む図

文久2年6月1日、弘前の絵師・平尾魯仙は岩木川を遡り、目屋へ向かった。



安門瀑布紀行04 田代村渡場之図



安門瀑布紀行05 鐘戸の湍之図



安門瀑布紀行06 新穂ヶ滝之図

「巖冬氷の節者誠に壯觀也、又氷大なれハ豊作、小なれハ不熟と云へり、」

新穂ヶ滝之図

田代村の上流約500mのところ、名坪平にある高さ30m・幅60cmほどの滝。現在は「乳穂ヶ滝」と表記する。冬季の氷結で知られる観光名所で、二本の氷柱ができ、大きな方は「粳乳穂」(うるちにお)と、小さい方は「糯乳穂」(もちにお)と呼ばれる。

一年を通じて多くの参詣者があり、菅江真澄も、寛政8年(1796)11月4日にここを訪ねている(「ゆきのもろたき」)。



冬の乳穂ヶ滝

旧暦正月17日には弘前藩の使者がここを訪れ、氷のようすを描いて藩主に報告し、吉凶を占った。稲作を「世の中」と言うことから「世の中滝」とも称した。





安門瀑布紀行17 「杉の下に里のあるハ砂子瀬也、左岸白色にして、頂切揃たる
連山邑里を憐る ことく、最美観なり、」（宮内庁書陵部「安門瀑布紀行」）



安門瀑布紀行20 長滝并晴雨考石の図 「此日和見石、根本に塩吹出ると云、」



安門瀑布紀行21 漂流の薪材を渡る図



堤を放して
薪材を流す
図
流木縦横に
転々して、
打合ふ音雷
の如く早き
事矢の如し、
最興の観物
なり、

安門瀑布紀行28 堤を放して薪材を流す図

「流木縦横に転々して、打合ふ音雷の如く早き事矢の如し、最興の観物なり、」

鬼河邊の郊野に薪材を積む図
舟に薪材と積む同



安門瀑布紀行29 鬼河邊の郊野に薪材を積む図



安門瀑布紀行32
曲淵の懸崖を跨る図

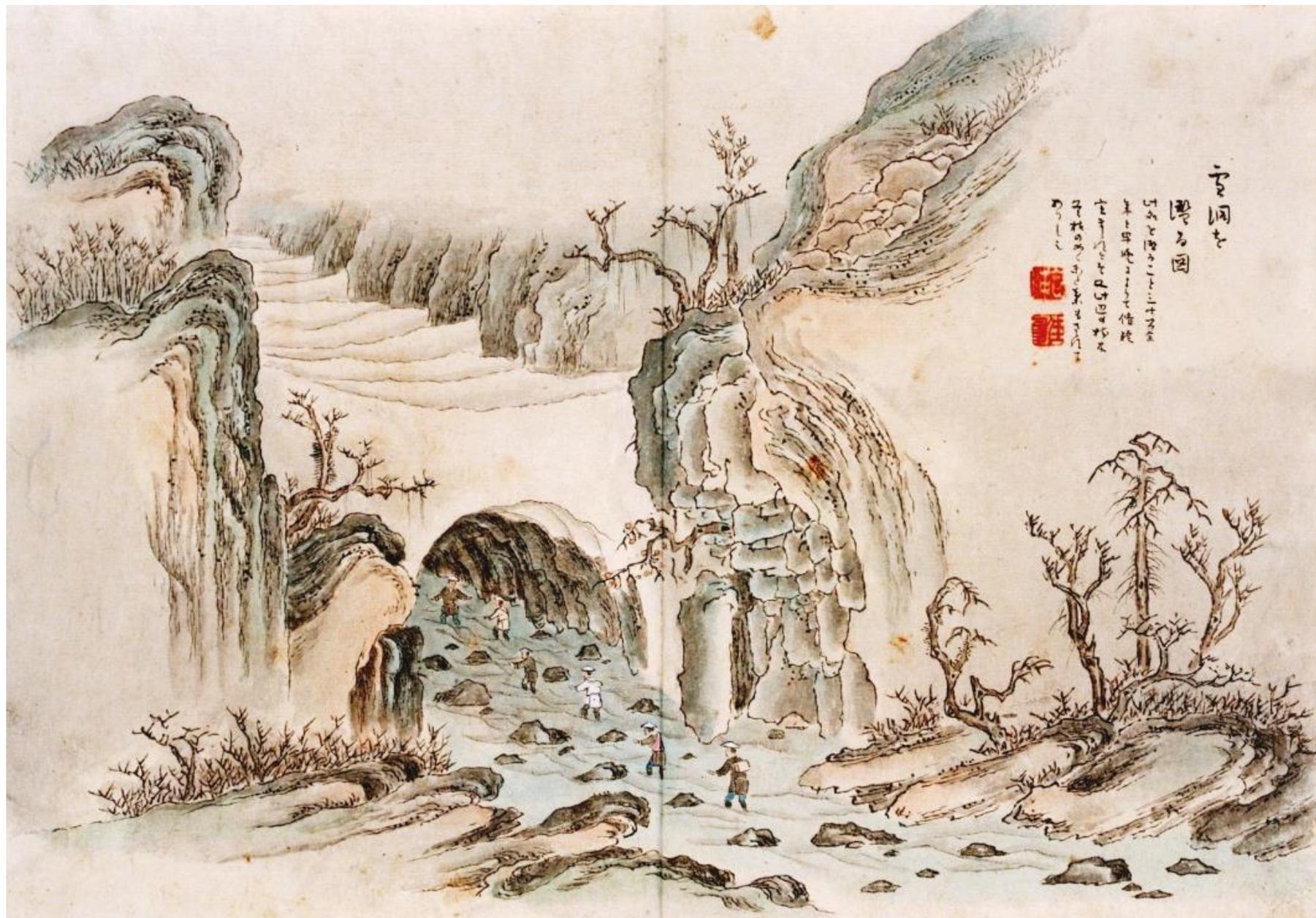
「三十間許登り、二十間許横ぎりて、下るに又二十間許也、」（宮内庁書陵部「安門瀑布紀行」）



安門瀑布にて
曲淵を下る図



安門瀑布紀行33 網に槌りて曲淵を下る図



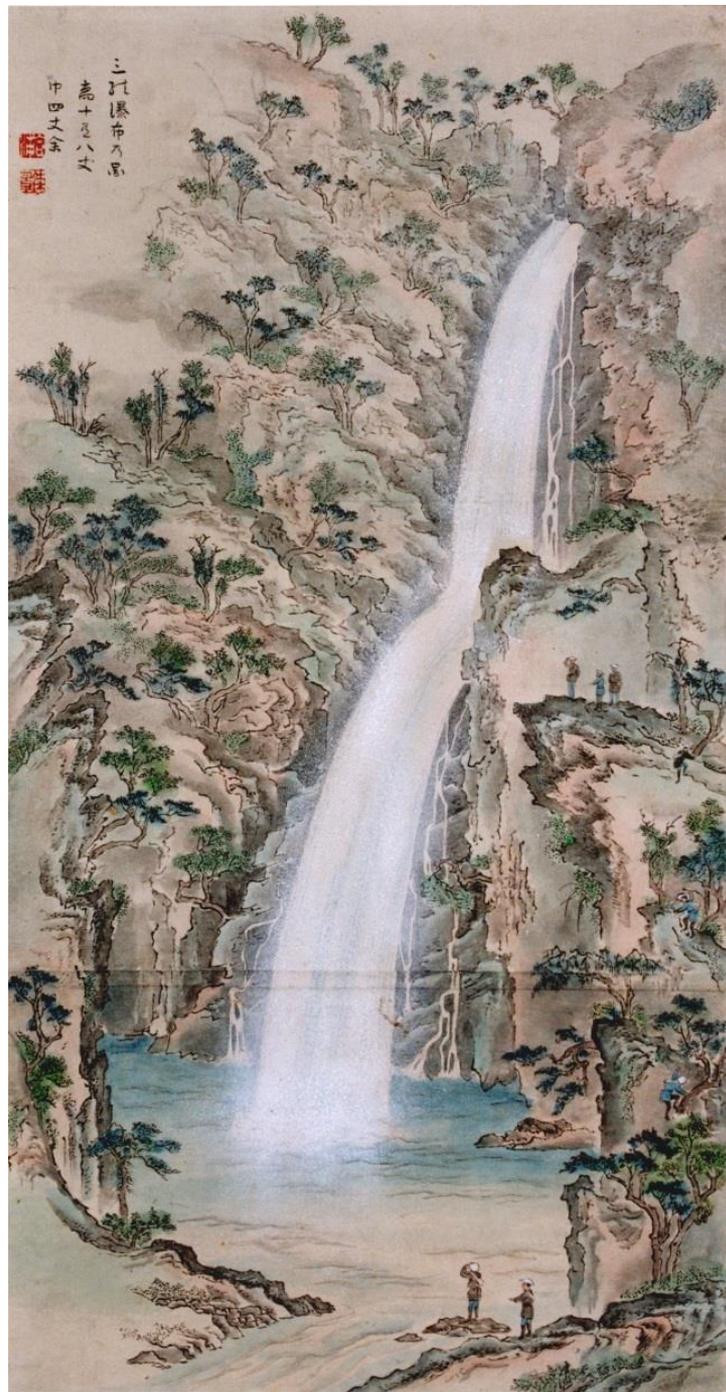
安門瀑布紀行35
雲洞を潜る図

「此処を潜ること三十間余、年と早晚によりて脩短定まらずと
そ、又此辺の樹木冬枯の如く、未だ葉もさゝすてありし、」



安門瀑布紀行36
魚留滝并三の滝へ跨る絶壁の図

「滝高・巾、共に二丈五尺許、
崖を跨ること二十間余、」



安門瀑布紀行37 三の瀑布の図

「高十有八丈、巾四丈余、」



安門瀑布紀行38 二の滝へ登る巖壁の図

「此険巖を登ること三十間許、又横に匍匐ふこと廿六間可、」



安門瀑布紀行39
奇石清流に布く図

「此処小洞より小鳥一羽
撮る、名をしるものなし、
奇鳥也、」

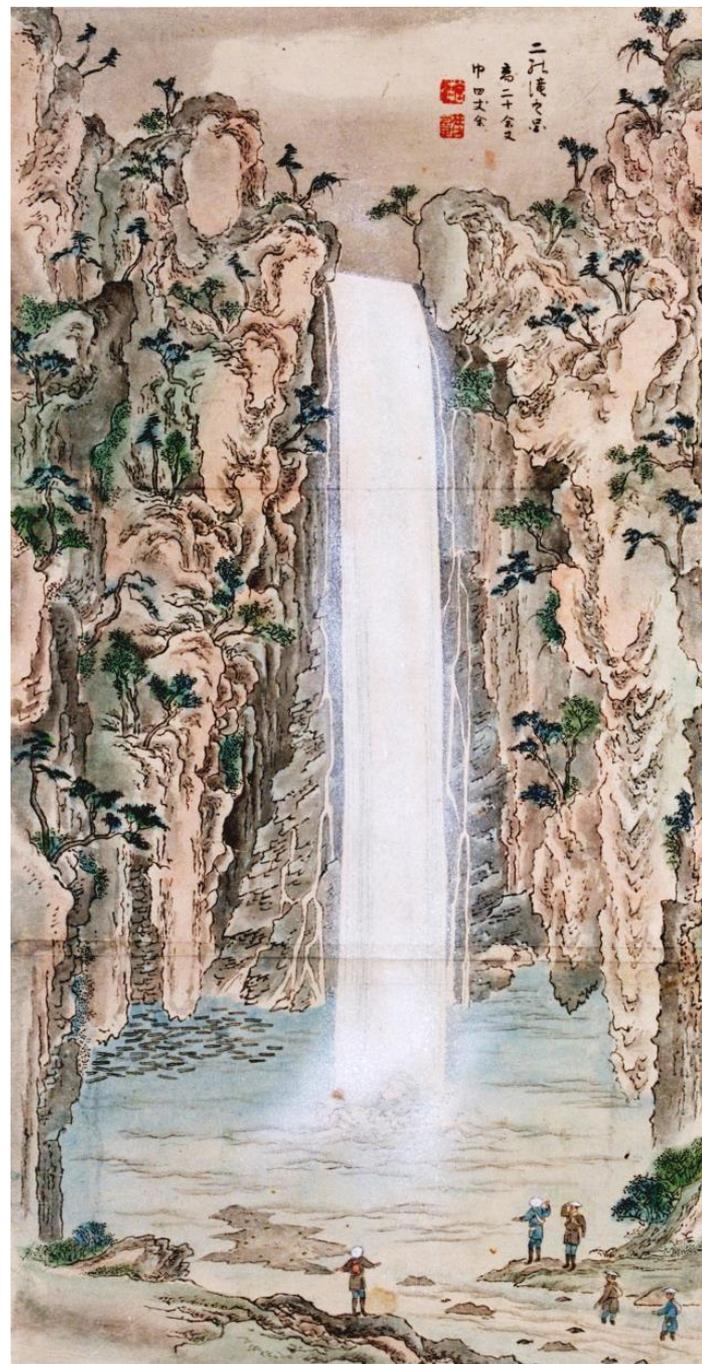
←『異物図会』より



31

安門瀑布紀行40 二の滝の図

「高二十余丈、巾四丈余、」





安門瀑布紀行41 響山峻嶮を踐て一の滝へ跨る図

「此嶮絶を登ること百三十間許、」

安門瀑布紀行43 一の瀑布首頭之図

「激流恐るへし、」





安門瀑布紀行45 布懸沢大落之図

「大略丈七・八尺、周り六・七寸也、
稀に八九尺、又一丈許も有とそ、此
両沢山椒魚最多く、他の魚ハ無し」

安門瀑布紀行44 一の滝之図

「高三十有六丈、巾四丈半、三滝すへて七十
有五丈也、」



安門瀑布紀行49 川原岱村古風之図

「婦人の頭に長き布を手拭様の物を前又後に結び、裾極て細き布袴を着し、立ながら給仕する也、燈ハ枯竹なり、男の風ハさして替りもなけれと、言語質朴、云へからず、」



菘虫山人「岩木川図巻」より 革秀寺より弘前城を望む…右手前が駒越で、岩木橋が架かる



三ノ渡の架橋…渡し場に石組みの桁橋



田代の船着場…綱を張ってある



榎ノ口土場
…流し木を積む